

「加能作次郎「羽織と時計」

リード文

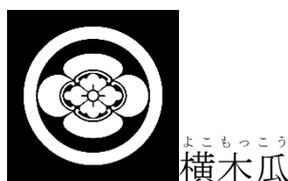
- ・「私」
- ・W 君（出版社の同僚。妻子と従妹と暮らす。生活は苦しかった。）

W 君が病で休職している期間、「私」は何度か彼を訪れ、同僚から集めた見舞金を届けたことがある。

W 君の病気も次第に快くなって、五月の末には、再び出勤する

『僕も長い間休んで居て、君に少からぬ世話になったから、ほんのお礼の印に羽二重を一反お上げしようと思っているのだが、同じことなら羽織にでもなるように紋を抜いた方がよいと思って』と言われる

W 君の郷里は羽二重の産地で、彼の親類に織元があるので、そこから安く、実費で分けて貰うので、外にも序があるから、そこから直接に京都へ染めにやることにしてある



「私」は辞退する術もなかった
一ヶ月後、W 君が届けてくれた
W 君と呉服屋へ行って裏地を買って羽織に縫って貰った
羽二重の紋付の羽織→今でもそれが私の持物の中で**最も貴重なもの**の一つ

『ほんとにいい羽織ですこと、あなたの様な貧乏人が、こんな羽織をもって居なさるのが不思議な位ですわね。』と妻は、私とその羽織を着る機会のある毎にそう言った。

W 君から貰ったのだということ、妙な羽目からつい言いはぐれて了って、今だに妻に打ち明けてない

妻が私が結婚の折に特に拵えたものと信じて居るのだ。

下に着る着物でも袴でも、その羽織とは全く不調和な粗末なものばかりしか私は持って居ないので、『よくそれでも羽織だけ飛び離れていいものをお拵えになりましたわね。』と妻は言うのであった。

『そりゃ礼服だからな。これ一枚あれば下にどんなものを着て居ても、兎に角礼服として何処へでも出られるからな。』

A 私はくすくす擦られるような思いをしながら、そんなことを言って誤魔化して居た。

なんとなく恥ずかしいような
気持ち→はっきりしない感情

私はこの羽織を着る毎に W 君のことを思い出さずに居なかった。

そして翌年の春、私は転職することになった。

当時は高額

W 君は送別会をする代りだといって、社の人達から二十円ばかり募金して私に記念品を贈ってくれた。

私は時計を持って居なかったので、自分から望んで懐中時計を買って貰った。

社の人の中には、内々不平を抱いたものもあったそう。まだ二年足らずしか居ないものに、記念品を贈るなどということは曾て例のないことで、これは W 君が、自分の病気の際に私が奔走して見舞金を贈ったので、その時の私の厚意に酬いようとする個人的感情から企てたことだといって W 君を非難するものもあったそう。



また中には、『あれは自分が罷める時にもそんな風なことをして貰いたいからだよ。』と卑しい邪推をして皮肉を言ったものもあったそう。

私は後でそんなことを耳にして非常に不快を感じた。
そしてW君に対して気の毒でならなかった。
そういう非難を受けてまで（それは君自身予想しなかったことであろうが）私の為に奔走して呉れたW君の厚い情誼を思いやると、私は涙ぐましいほど感謝の念に打たれるのであった。

それと同時に、その一種の恩恵に対して、常に或る重い圧迫を感じざるを得なかった。

羽織と時計。私の身についたものの中で最も高価なものが二つともW君から贈られたものだ。

この意識が、今でも私の心に

感謝の念 ⇔ B 何だかやましいような気恥しいような、訳のわからぬ一種の重苦しい感情を起させるのである。

社を出てから以後、私は一度もW君と会わなかった。

W君はその後一年あまりして病気が再発して遂に社を辞し
いくらかの金を融通して来て、電車通りに小さなパン菓子屋を始めたこと自分は寝たきりで店は主に従妹が支配して居てそれでやっと生活して居るということなどを私は或る日途中で社の人に遇った時に聞いた。

C 私はW君よりも、彼の妻君の眼を恐れた

私が時計を帯にはさんで行くとする、『あの時計は、良人が世話して進げたのだ。』斯う妻君の眼が言う。
私が羽織を着て行く、『あああの羽織は、良人が進げたのだ。』斯う妻君の眼が言う。
もし二つとも身につけて行かないならば『あの人は羽織や時計をどうしただろう。』斯う妻君の眼が言うように空想されるのであった。
どうしてそんな考えが起るのか分らない。

私自身の中に、そういう卑しい邪推深い性情がある為であろう

そればかりではない、こうして無沙汰を続ければ続けるほど、私は W 君の妻君に対して更に恐れを抱くのであった。

『〇〇さんて方は随分薄情な方ね、あれきり一度も来なさない。こうして貴郎が病気で寝て居らっしゃるのを知らないんでしょうか、見舞に一度も来て下さらない。』
斯う彼女が彼女の良人に向って私を責めて居そうである。
私は逃げよう逃げようとした。

そんなことを思いながら、三年四年と月日が流れるように経って行った。

今年の新緑の頃、子供を連れて郊外へ散歩に行った時に、D 私は少し遠廻りして、W 君の家の前を通り、原っぱで子供に食べさせるのだからと妻に命じて、態と其の店に餡パンを買わせたが、

実はその折陰ながら家の様子を窺い、うまく行けば、全く偶然の様に、妻君なり従妹なりに遇おうという微かな期待をもって居た為めであった。

結局、W 君と会うことは二度となかった

それ以来、私はまだ一度も其店の前を通ったこともなかった。